



《巻頭言》

メッセー ジ

農薬工業会会長 小平 祐

平成時代と共に、いくつかのメッセージが私に届けられたように思う。

1月8日、天皇崩御の翌日、私は皇居前の人波の中で小雨に濡れていた。人々はただ静かで、涙ぐむ人も多かった。私も濡れそぼつ松の緑を仰ぎながら、一時間余りを立ち尽くし、この人々との血の繋がりを思っていた。

薄墨色の空から降りそそぐ小糠雨は、我ら日本人の一体感を確かめさせるメッセージのようだった。

2月3日、「殯宮祇候の儀」が、暖冬の象徴のような陽を浴びて、“昭和宮殿”で執り行われた。

仄暗い、白一色の“松の間”は真昼の静寂に閉ざされていた。高松宮妃も、島津貴子さんも微動だにせず、20名の参列者の息遣いと衣擦れの音だけが伝ってくる。無言で始まり、無言で終る半時の儀式だった。

“春秋の間”に下って、香り高い緑茶を頂くと、中庭の白砂に早春の光が溢れて、満開の紅梅、白梅が目映ゆかった。

悲しい程の明るい日差しは、昭和の苦しみを漂白し去って、新しい希望の平成時代の到来を告げるメッセージのようだった。

2月24日、新宿御苑での「大喪の礼」は冷たい雨と烈しい風に曝された。柵も幡も笛も氷雨

に打たれ葱華輦だけが沓音を揃えて肅然と進んでいった。両陛下の歩みも真に淋しげであった。

この日私を降りこめた7時間の氷雨は、暖衣飽食で忘れていた昔の辛さを思い出させてくれた。同時に、これからの困難を克服せよという貴重なメッセージだと思った次第である。

一連の儀式に、私は農薬工業会の皆さんの代りに参列させて頂いたわけで、是らのメッセージは農薬業界にも投げかけられたように感じた。即ち農薬業界も一体感を確め、新しい希望の時代を迎えて、来るべき困難を克服せよということではなかろうか。

さて、現実的なメッセージも到来している。“農薬懇談会”の構想である。

農薬冬の時代と言われながら、対応策がないという見方もあれば、世界的には成長するファインケミカルだともいえる。早急に現状を分析し、当面の課題を捕らえ、将来のビジョンを描く必要があるように思う。

取り組むべき各テーマの基礎は研究開発である。その基礎の強力な支えであり、世界的にハイテクを推進されている“日植調”さんの会員の皆さんへの期待は大きい。

この際、業界をあげて各種のメッセージに対応しつつ、平成初年度の活動を積極的に展開したいものである。

日植調さんをはじめ農薬業会全員の御健闘と御協力を心より念願する次第である。